| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 辻泰明 |
| 学 位 の 種 類 | 博　士（情報学） |
| 学 位 記 番 号 | 博 乙 第　　2846　　号 |
| 学位授与年月日 | 平成　29 年　9 月　25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第２項該当 |
| 審 査 研 究 科 | 図書館情報メディア研究科 |
| 学位論文題目 | 女性向け教養番組の研究－「花」を主題とする講座の系譜と数量分析－ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　　査 | 筑波大学 | 教授 | 博士（文学）綿抜豊昭 |
| 副　　査 | 筑波大学 | 教授 | 博士（学術）中山伸一 |
| 副　　査 | 筑波大学 | 教授 | 博士（史学）白井哲哉 |
| 副　　査 | 筑波大学 | 准教授 | 博士（工学）宇陀則彦 |
| 副　　査 | 放送大学 | 教授 | 博士（学術）岩永雅也 |

## 論　文　の　要　旨（2,000 字程度）


本論文は、日本の放送メディアにおける女性向け教養番組について、70 年近くに渡る編成を通観し、特に「花」を主題とする講座に関する一次資料の調査と分析をおこなうことによって、女性視聴者層への文化伝播の様相を、具体的事例に基づいて考察している。

本論文で用いられた研究方法は、第一に、放送の公式記録として『番組確定表』と称される一次資料の調査、第二に、その調査結果に対する数量分析である。

本論文の構成は、日本の放送史における画期にしたがって、ラジオ草創期、ラジオ戦時期、ラジオ占領期、ラジオからテレビへの転換期、テレビ発展期、テレビ変化期の各時期に区分し、時期ごとに章を立てて調査､分析と考察をおこない､最後に各期を通観した考察をおこなったものとなっている。

第 1 章では、本論文の研究背景と先行研究を示した上で、研究目的を明らかにしている。続いて、研究方法の節において、「女性向け教養番組」という用語の定義と各年度の年鑑に記載された番組を対象領域とすることの明示、各時期区分に応じた課題の設定、調査対象資料と分析項目の提示をおこなっている。分析項目は、放送本数の年度ごと推移、各回の副題における関連語の出現率、出演者の属性についての構成比率などであることが示されている。

第 2 章では、ラジオ草創期について、文化の伝播に関してラジオという新しいメディアが有した特徴を明らかにすることを課題として、調査、分析と考察がおこなわれている。そして、(1) 草創期の女性向け教養番組における三つの放送枠が有した特性、(2)「花」を主題とする講座が有した季節性と入門性という二つの類型と、後者におけるテキスト発刊の効果、(3) 放送メディアの広範な伝達能力よる新興流派発展への寄与を考察し、文化の伝播に関してラジオという新しいメディア

が有した特徴の一端を明らかにしている。

第 3 章では、ラジオ戦時期および占領期について、両時期を対照してそれぞれの相違点あるいは共通点を明らかにすることを課題として、調査、分析と考察がおこなわれている。そして、(1) 戦時期と占領期での放送枠における相違点と「花」を主題とする講座における共通点、(2) 戦時期と占領期の女性向け教養番組で「花」のような生活文化の伝播が低調であったことの理由としての「教化」の存在、(3) 数少ない講座が多くの反響と支持を集めたことが示す「文化の機会均等」の重要性を考察し、両時期の相違点と共通点を明らかにしている。

第 4 章では、ラジオからテレビへの転換期について、それぞれのメディアにおける特徴を明らかにすることを課題として、調査、分析と考察がおこなわれている。そして、この時期における「花」を主題とする講座は、放送時間帯はラジオとテレビとで棲み分けが図られた上で、(1) 講座の二つの類型のラジオとテレビとでの分化、(2) 映像を有するテレビにもテキストの随時参照性が求められたことによる出版との連携、(3) テレビにおける、女性出演者（講師）の登用と講師の映像の重要性を考察し、ラジオとテレビそれぞれの特徴を明らかにしている。

第 5 章では、テレビ発展期について、「花」と「茶」それぞれを主題とする講座の放送を比較することによって、テレビによる日本文化伝播の様相を明らかにすることを課題として、調査、分析と考察がおこなわれている。そして、(1) 女性向け教養番組の系譜における「実用」を旨とするものへの収斂と講座形式による伝統的な生活文化伝播の最盛期の形成、(2)「花」における「季節」と「茶」における「技法」という講座内容の対比、(3)「花」の放送本数増減に顕在化した、社会情勢とテレビメディアとの連関を考察し、テレビによる日本文化伝播について、その様相の一端を明らかにしている。

第 6 章では、テレビ変化期について、この期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座について、その特徴をテレビの「変化」と照応することを課題として、番組副題の記述に対して形態素解析をおこない、品詞分布の変遷と編成方針との関連を分析している。そして、(1) 1980 年代半ばの「模索の時期」と同期した番組副題における名詞比率の増大と動詞比率の減少という遷移、(2) その遷移と「家庭にいる女性」という対象の消失との連関、(3) 新番組（放送枠）の設置への動きと女性向け教養番組の使命の終結を考察し、この期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座が有する特徴を明らかにしている。

第 7 章では、各時期を通観して考察をおこない、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の系譜を示し、2 類型の変遷を明らかにしている。そして、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座が、開始時の放送が目的とした「文化の機会均等」に貢献したこと、および、近代流派普及への貢献、「季節性」の一貫した存在、ラジオとテレビ双方におけるテキストの必要性と出版との連携、映像を有するテレビにおける出演者の重要性、社会情勢と放送本数増減の関連などによって、放送というメディアの特性を際立たせていることを考察して、本論文の結論としている。

## 審　査　の　要　旨（2,000 字以上）

【批評】

本論文は、70 年近くにおよぶ放送の歴史を踏まえて、女性向け教養番組における「花」を主題と

する講座の特徴と功績について考察しており、これまで看過されてきた女性聴取者ないし視聴者と教養番組の関係の解明、編成の変容と社会情勢の変化との対応の解明を通じて、日本における放送メディアの特質を明らかにした内容となっている。

本論文は、全 7 章構成のうち、まず第 1 章において、日本における放送メディアの始まりと女性向け教養番組の位置づけ、および先行研究を概観した後、本論文の研究目的と方法を示し、女性向け教養番組として定義する領域、放送史に応じた時期区分の必要性と各時期における課題、調査対象資料の性格と重要性、分析方法と項目を呈示している。定義においては「教養」と語の多義性を踏まえて先行研究の諸説を検討しており、妥当性を有するものといえる。時期区分においては、放送史の画期である理由が論拠をもって示されており、適切な区分であると首肯できる。調査対象資料の性格については、当該資料を用いた他の研究にも言及しつつ、その正当性を立証している。分析項目は対象資料の各要素に即して設定されており重大な遺漏は無い。このように、第 1 章は論理的に構成されており博士論文の導入部として適格な展開といえる。

続く第 2 章から第 6 章まででは、ラジオ草創期、ラジオ戦時期および占領期、ラジオからテレビへの転換期、テレビ発展期、テレビ変化期の各時期に分けて、それぞれの時期における女性向け教養番組の編成について詳述し、その中核的題材であった「花」を主題とする講座について、放送本数の推移、番組副題の記述、出演者の構成といった各項目に基づいた数量的分析をおこない、実証的に論点を構築している。考察においては、第 2 章では、「花」の歴史に関する文献との照応、第 3 章では、戦時期と占領期の対照、第 4 章では、ラジオとテレビの対比、第 5 章では、「花」と「茶」の比較、第 6 章では、形態素解析の結果と資料記述の突合がおこなわれており、複眼的な論考によって結論の妥当性を強化している。また、これらの章では、数量的分析の結果に対する考察において、その裏付けとなる文献を援用して議論されており、結果の信頼性を担保するものとなっている。ただし、「花」以外の題材については、第 5 章で「茶」が対象とされているのを除いて、大きくは採り上げられておらず、今後の展開が望まれるところである。

最後の第 7 章では、各時期を通観して、女性向け教養番組と「花」を主題とする講座について、その特徴と功績を議論し、本論文のまとめとしており、その結論もおおむね首肯できるものである。中でも、講座の内容における「入門性」と「季節性」の 2 類型の存在とその歴史的変遷および社会情勢と放送本数増減の関連を指摘している点は、本論文が提示した新たな視点といえる。

全体として本論文の特徴は、以下の 3 点に集約できる。

第一に、女性向け教養番組の変遷と功績を、特定の時期によらず、通史として展望したことである。このことは、他の論文にはみられない特質であり、このことによって、本論文は、日本の放送メディアの特質が、対象聴取者層ないし視聴者層として一貫して女性を重視している点、および、女性聴取者層ないし視聴者層への訴求を教養番組における講座の編成によって果たそうとした点にあることを明らかにしており、放送史の研究に新たな視座を加えたといえる。

第二に、一次資料として、放送の公式記録である『番組確定表』を調査し、実証的に事例を検討したことである。『番組確定表』を用いた研究はこれまでもなされてきたが、いずれもある特定の時期についてのものであり、70 年近くにおよぶ期間を対象として、放送の記録を実証したことはなかった。本論文は『番組確定表』の記録を数量的に分析して、事例の特徴を客観化して示したことにより、抽象的な議論に陥ることなく、論理が展開されたといえる。放送番組の内容を形態素解析などの方法を用いて分析した研究はこれまでになく、今後、同様の方法によって放送番組を分析することがおこ

なわれうる。また、放送の歴史における他の題材についても同資料を用いた展開が期待できる。

第三に、数量的分析の結果に対して考察をおこなうに際し、さまざまな記録や文献資料の記述を傍証として、社会情勢の変化や日本文化の特質との照合をおこなったことである。このことにより、数量的分析の結果が単なるデータの集積としてとどまることなく、放送番組の編成がいわば「社会の鏡」として機能するということを示し、社会史や文化史と放送の関係について明確な裏付けを持つ数々の知見が得られることとなった。

このように日本の放送メディアにおける女性向け教養番組の特徴と功績を「花」を主題とする講座を通じて明らかにした本論文は、放送の歴史と特性に関する研究および放送資料の利活用にとって、貴重な資料となるものである。それゆえ、今回、本論文が扱った『番組確定表』に基づくより包括的な対象領域の研究を望みたいところである。また、文化資本の活用という視点から、放送と他メディアとの連携を視野に入れたあらたな課題の抽出も可能であり、さらなる分析と考察を期待したいところである。さらにいえば、本論文の調査と分析は、テレビ番組に変化が生じ、女性向け教養番組と「花」を主題とする講座が放送開始以来の使命である「文化の機会均等」を終結させる時点である1990 年代初頭までしかなされていない。本論文でいう「テレビ変化期」以降、多チャンネル化やインターネットの興隆という新たな局面をへて、放送は今日に至っているわけであり、この観点からすれば、本論文が扱った時期以降についての考究がより詳細になされる可能性も追求しえたのではないかと考えられる。また、編成の推移のみならず、個々の番組内容の分析と編成のダイナミズムを統合した分析および考察についても、録画テープの保存が本格化した 1990 年代以降については可能となることから、今後の課題とすべきであると指摘できる。

とはいえ、こうした点が本論文の価値を損なうものではなく、総合評価として本論文は博士論文として十分な内容を持つものと判断される。

【学力の確認結果】

平成 29 年 8 月 22 日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答をおこなった。引き続き、「図書館情報メディア研究科博士後期課程（論文博士）の学位論文審査に関する内規」第 23 項第 3 号に基づく学力の確認をおこない、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

【結論】

よって、本学位論文の著者は、博士（情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認められる。